報　告

大学生の学力低下に関する調査結果

研究開発部評価・追跡研究部門　鈴木規夫
研究開発部試験制度研究部門　荒井克弘
研究開発部進学適性研究部門　柳井晴夫

1　はじめに

戦後40％でスタートした高校進学率はわずか30年の間に著しい上昇をとげ，昭和50年には90％を超え，現在ではほぼ全入に近い。高校生の急増，多様化によりそれまでの教育課程の実施が困難になったことはいうまでもない。学習指導要領に定められる必修科目数・単位数の大幅な削減のほか，卒業単位数の切り下げも行い，生徒の能力・適性に応じて選択できるコース・類型制も広く普及した。入学試験もまた，この間に大きな変化を経験している。国立大学の場合，昭和54年に開始された共通第１次学力試験では，受験者全員に５教科７科目が課せられていたが，平成２年に大学入試センター試験に移行してからは，アラカルト方式が採用され，５教科受験者の割合が減少する反面，４，３，２教科受験者の割合が増加している。一方，個別大学入試においても試験科目数の減少が続き，現在のところ，試験科目数は２科目のところが最も多く，つづいて１科目，３科目の順になっている。

こういった入学試験における教科・科目数の減少や教育課程の変更に伴い，高等学校の生徒の間では，苦手科目や受験に関係ない科目は切り捨てていくという風潮が広まっており，今後，少子化の進行によって，入試科目数の減少はさらに進み，入試の軽量化がより一層促進されると予想される。大学の中には，こうした大学生の学力低下により補習教育（リメディアル教育）によって解決しようという大学が増加しており，ユニバーサル化を前に大学教育も構造変動の時代を迎えている。

このような背景をもとに，大学生の学力低下の実態をより明確に把握するために，大学入試センターでは，平成10年12月に全国の国公立大学の361の学部長に「学力低下」に関するアンケート調査を実施した。以下に，その結果の概要について紹介する。

2　大学生の学力低下に関する調査結果について

調査は，全国国立95大学の362学部の学部長を対象とし，平成10年11月30日から約２週間にわたって実施された。回答数は361学部と，ほぼ全数に近いものであった。なお，分析にあたり，所属する学部が芸術学部，体育学部，その他の学部と記載された計18の学部を除く343学部を文系（146学部42.6％），理系（197学部57.4％）に分類した。11の項目群からなる調査項目と，全体，及び文系，理系別の回答結果を付表に示した。

これらの項目群に対する回答形式は多肢選択方式と複数回答を許容するものに大別される。まず問１，２において各大学の新入生がどの程度の学力を身につけて大学へ進学しているか，また，大学での学習に必要な教科・科目の知識，論理的思考力，理解力，表現力等の基礎能力，学習に必要な関心，意欲，学力全般について低下しているかについて問うものであった。問１，２を通して，「学力低下が問題になっている」と回答した学部数は281で全体の77.8％，その割合の高い学部は，工学部，理学部，教員養成学部，農水産学部，歯学部，法学部で，低い学部は医学部，薬学部，文学部であった。以下に，学力低下が問題となっていると回答した281学部（このうち，文系（112学部），理系（156学部），その他（13学部））について，問３以降の質問項目である「学力低下の具体的内容」，「学力低下が顕在化した時期」「学力低下が目立つようになった時期」「学力低下の原因」「学力低下に対して講じている対策」「学力低下に対する対策として重要な要因」の分析結果の概要について述べる。

まず，入学後いつ学生の学力低下が顕在化するかという問に対しての回答から，全体として20％の学部（特に理系の学部）においては入学直後に学力低下が顕在化し，教養課程の教育においては56％の学部で，専門教育の教育においては71％の学部で学力低下が顕在化したとみられていることが判明した。理系，文系別にみると，入学直後において学力低下が見られる割合は理系24％，文系12％と理系が約２倍多い。

学力低下の具体的内容としては「自主的主体的に取り組む意欲が低い（84％）」，「論理的に思考し，それを表現する力が弱い（77％）」が多く見られた。また，「英語等外国語の基礎学力が低い（46％）」，「日本語の基礎学力が低い（36％）」「文献検索など大学での学び方を知らない（34％）」，「大学での学習に必要な基礎科目を履修していない（41％）」であった。英語等の外国語，日本語，文献検索の仕方等についての

基礎学力の欠如は，入学直後に顕在化する傾向がみられた。学部別に顕著な差が見られた項目は「英語力等外国語の基礎学力が低い」で他の学部に比べ，理学部，工学部，薬学部で高い比率がみられた。

学力低下の原因として，「高校以下の教育が目標とする自主的に考え，表現する能力が身についていない」が64％の学部で，「進学率の上昇と選抜手段の多様化」が55％，「入試科目の軽量化」が52％の学部で挙げられていた。

学力低下の原因が「入試科目の軽量化」「高校での履修歴の多様化」にあると回答した学部の多くに，「入試の受験科目数を増やすべき」「大学入学の要件として，特定科目を履修させるべき」という回答が見られたが，こういった回答の多かった学部は理学部，薬学部，教員養成学部であった。上記に示したような学力低下に対して，目下，各学部が講じている対策を多い順に並べると，「個々の教官が授業をわかりやすく工夫する（94.1％）」「TA（ティーチングアシスタント）の導入により学習密度を高める（81％）」「必修科目の増加，履修の順次性の強化などによるカリキュラムの改善（70％）」「小人数クラスの授業の増加（66％）」であった。大学で「補習教育」を実施している学部は文系（９％）と理系（44％）で著しい差がみられた。

こういった学力低下対策を講じている大学学部が，学力低下対策として重要と考えている項目は「高校以下の教育において，論理的思考能力，表現能力などの基礎的能力をきちんと身につけさせること（80％）」，「大学入試において，知識量だけでなく，論理的思考力，表現力，関心意欲を含めて測定すべきである（64％）」等といったように論理的思考力，表現力に関したものが多く，「受験科目数の増加(32.6％)」「大学入学の要件として特定科目の履修指定（27.3％）」，「大学における補習教育の充実（20.2％）」といったように基礎学力欠如に対する対策の実施にはそれほど前向きに考えていないような傾向がみられた。

付表：調査項目と文系，理系別集計結果

Q１．先生の学部の新入生は、全体としてどの程度の学力を身につけて大学へ入学してきていると思いますか。

a．大学での学習に必要な教科・科目の知識

	全体	文系	理系
1　充分身についている	16(4.4)	7(4.8)	9(4.6)
2　（1と3の中間）	94(26.1)	34(23.3)	53(27.0)
3　ある程度身についている	215(59.7)	87(59.6)	118(60.2)
4　（3と5の中間）	32(8.9)	16(11.0)	15(7.7)
5　ほとんど身についていない	3(0.8)	2(1.4)	1(0.5)

b．大学での学習に必要な論理的思考力・理解力・表現力等の基礎的能力

	全体	文系	理系
1　充分身についている	16(4.4)	5(3.5)	11(5.6)
2　（1と3の中間）	65(18.1)	28(19.3)	30(15.2)
3　ある程度身についている	179(49.7)	82(56.6)	88(44.7)
4　（3と5の中間）	95(26.4)	27(18.6)	66(33.5)
5　ほとんど身についていない	5(1.4)	3(2.1)	2(1.0)

c．大学での学習に必要な関心・意欲

	全体	文系	理系
1　充分身についている	14(3.9)	3(2.1)	8(4.1)
2　（1と3の中間）	77(21.4)	32(21.9)	40(20.4)
3　ある程度身についている	177(49.2)	74(50.7)	96(48.5)
4　（3と5の中間）	84(23.3)	30(20.6)	52(26.5)
5　ほとんど身についていない	8(2.2)	7(4.8)	1(0.5)

d．学力全般について

	全体	文系	理系
1　充分身についている	14(3.9)	5(3.4)	9(4.6)
2　（1と3の中間）	86(24.0)	36(24.7)	43(22.0)
3　ある程度身についている	229(63.8)	93(63.7)	128(65.3)
4　（3と5の中間）	30(8.4)	12(8.2)	16(8.2)
5　ほとんど身についていない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

Q２．新入生の学力はここ数年どのような傾向にありますか。

a．大学での学習に必要な教科・科目の知識

	全体	文系	理系
1　低下している	27(7.5)	10(6.9)	17(8.6)
2　やや低下している	157(43.7)	63(43.2)	88(44.7)
3　変わりない	163(45.4)	69(47.3)	86(43.7)
4　やや上昇している	12(3.3)	4(2.7)	6(3.0)
5　上昇している	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

b．大学での学習に必要な論理的思考力・理解力・表現力等の基礎的能力

	全体	文系	理系
1　低下している	30(8.4)	10(6.9)	19(9.6)
2　やや低下している	187(52.2)	77(53.1)	104(52.8)
3　変わりない	130(36.3)	54(37.2)	68(34.5)
4　やや上昇している	11(3.1)	4(2.8)	6(3.0)

5 上昇している	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

c．大学での学習に必要な関心・意欲

	全体	文系	理系
1 低下している	37(10.3)	13(8.9)	24(12.2)
2 やや低下している	160(44.6)	65(44.5)	92(46.7)
3 変わりない	144(40.1)	63(43.2)	71(36.0)
4 やや上昇している	16(4.5)	5(3.4)	9(4.6)
5 上昇している	2(0.6)	0(0.0)	1(0.5)

d．学力全般について

	全体	文系	理系
1 低下している	24(6.7)	8(5.5)	16(8.1)
2 やや低下している	172(48.0)	73(50.3)	93(47.2)
3 変わりない	144(40.2)	56(38.6)	81(41.1)
4 やや上昇している	16(4.5)	7(4.8)	6(3.1)
5 上昇している	2(0.6)	1(0.7)	1(0.5)

※Q３以下は学生の学力が低下傾向にあると答えた281学部のデータによる。

Q３．学生の学力低下が顕在化するのはどのような時期ですか。（複数回答）

	全体	文系	理系
1 入学直後	56(20.0)	14(12.4)	39(24.8)
2 教養的教育	157(56.1)	62(54.9)	86(54.8)
3 専門的教育	198(70.7)	84(74.3)	109(69.4)

Q４．学生の学力低下はどのような経過をたどっていますか。（複数回答）

	全体	文系	理系
1 学年が進むにつれて次第に解消する	65(23.1)	25(22.1)	40(25.3)
2 学年にかかわらず学力低下は存在する	213(75.8)	86(76.1)	117(74.1)
3 学年が進むにつれてますます深刻になる	37(13.2)	17(15.0)	20(12.7)

Q５．学力低下の具体的内容についてお尋ねします。先生の学部の場合、学生の学力低下が深刻だと思われるのはどのような側面についてですか。（複数回答）

	全体	文系	理系
1 自主的、主体的に課題に取り組む意欲が低い	239(84.8)	93(81.6)	137(86.7)
2 論理的に思考し、それを表現する力が弱い	218(77.3)	83(72.8)	127(80.4)
3 必要な基礎科目は履修しているが、理解が不十分	135(47.9)	43(37.7)	88(56.0)
4 英語等外国語の基礎学力が低い	131(46.5)	38(33.3)	89(56.3)
5 大学での学習に必要な基礎科目を履修していない	118(41.8)	38(33.3)	75(47.5)
6 日本語の基礎学力が低い	102(36.2)	37(32.5)	60(38.0)
7 文献検索その他、大学での学び方を知らない	97(34.4)	50(43.9)	44(27.9)
8 他人の考えを理解する能力が低い	67(23.8)	23(20.2)	41(26.0)
9 数量的データを分析する基礎的能力が低い	49(17.4)	21(18.4)	26(16.5)

Q６．学生の学力低下が目立つようになったのはいつ頃からですか。

	全体	文系	理系
1 平成９年以降（新教育課程の入学者になってから）	19(6.8)	4(3.6)	15(9.6)
2 平成２年以降（大学入試センター試験がはじまった頃から）	156(56.1)	68(60.7)	82(52.6)
3 昭和54年以降（共通第１次学力試験がはじまった頃から）	78(28.1)	28(25.0)	47(30.1)
4 その他	25(9.0)	12(10.7)	12(7.7)

Q７．学生の学力低下は何に起因すると思われますか。（複数回答）

	全体	文系	理系
1 受験学習に偏り、問題解法は知っていても概念理解に欠ける学生が入学してくるようになった	187(66.5)	70(62.0)	110(69.6)
2 高校以下の教育が目標とする「自主的に考え、表現する能力」を身につけさせることができていない	181(64.4)	69(61.1)	108(68.4)
3 進学率の上昇、選抜手段の多様化等により、学力が低い学生が入学してくるようになった	157(55.9)	65(57.5)	86(54.4)
4 入試の軽量化、試験科目の削減	148(52.7)	51(45.1)	91(57.6)
5 高校でのカリキュラムが選択的になり、学生の履修歴が多様化した	122(43.4)	39(34.5)	80(50.6)
6 総合的な学力に欠ける学生が多く入学してくるようになった	82(29.2)	32(28.3)	46(29.1)
7 高校以下の教育内容が身についていない	44(15.7)	13(11.5)	28(17.7)

Q８．大学教育を実施するうえで、学生の学力低下は実際に障害となっていますか。

	全体	文系	理系
1 授業が成り立たないなど、かなり支障が生じている	16(5.7)	2(1.8)	14(8.8)
2 やや支障が生じている	220(78.3)	85(75.2)	126(79.8)
3 それほど支障はない	42(14.9)	23(20.4)	18(11.4)
4 その他	3(1.1)	3(2.7)	0(0.0)

Q９．学生の学力低下について、先生の学部ではどのような対策を講じていますか。

	全体	文系	理系
1 個々の教官が授業を分かりやすく工夫する	255(94.1)	105(95.5)	141(93.4)
2 TA（ティーチング・アシスタント）等を導入し学習指導の密度を高める	215(81.1)	77(73.3)	128(85.3)
3 必修科目の増加，履修の順次性を強化するなどカリキュラムの改善を行なう	178(70.1)	70(68.6)	103(72.0)
4 少人数クラスの授業を増やす	169(66.0)	74(69.2)	92(65.3)
5 補習授業を行う	74(29.4)	9(9.1)	64(44.1)
6 基礎科目のクラス編成を未習・既習組に分ける	37(15.0)	4(4.0)	29(21.0)

	全体	文系	理系
7　習熟度別のクラス編成を行う	17(6.9)	5(5.0)	9(6.6)

Q10. 学生の学力低下対策に現在どのくらいの人手・時間を投入されていますか。

1　専任教員ではどのくらいの人々が学力低下対策にかかわっていますか。

	全体	文系	理系
1　0～10%	81(31.3)	33(32.7)	45(30.4)
2　10～20%	75(29.0)	31(30.7)	41(27.7)
3　20～30%	46(17.8)	13(12.9)	30(20.3)
4　30～40%	19(7.3)	5(5.0)	14(9.5)
5　40%以上	38(14.7)	19(18.8)	18(12.2)

2　学力低下対策のために新たに必要とされる非常勤講師の数は全専任教員の数に比してどの位になりますか。

	全体	文系	理系
1　0～10%	91(37.6)	37(40.7)	52(36.7)
2　10～20%	75(31.0)	26(28.6)	44(31.0)
3　20～30%	62(25.6)	23(25.3)	37(26.1)
4　30～40%	11(4.5)	5(5.5)	6(4.2)
5　40%以上	3(1.2)	0(0.0)	3(2.1)

Q11. 学力低下の対策として何がもっとも重要だと思いますか。（複数回答）

	全体	文系	理系
1　高校以下の教育において論理的思考能力、表現能力などの基礎的な能力をきちんと身につけさせる	228(80.9)	94(83.9)	126(79.3)
2　大学入試において、知識の量だけでなく論理的思考力、表現力、関心・意欲などを含めて判定する（あるいはこれらを判定の資料に含める）	182(64.5)	76(67.9)	98(61.6)
3　高校において、大学での学習に必要な教科・科目を充分に履修させる	130(46.1)	38(33.9)	87(54.7)
4　大学入試の受験科目数を増やす	92(32.6)	27(24.1)	60(37.7)
5　各大学が個別学力検査の改善を工夫する	78(27.7)	28(25.0)	45(28.3)
6　大学入学の要件として特定の科目を履修指定させる	77(27.3)	11(9.8)	62(39.0)
7　大学においてリメディアル（補習・補正）教育を充実させる	57(20.2)	20(17.9)	34(21.4)
8　総合的な学力を判定できるような検査を工夫する	43(15.2)	15(13.4)	26(16.4)